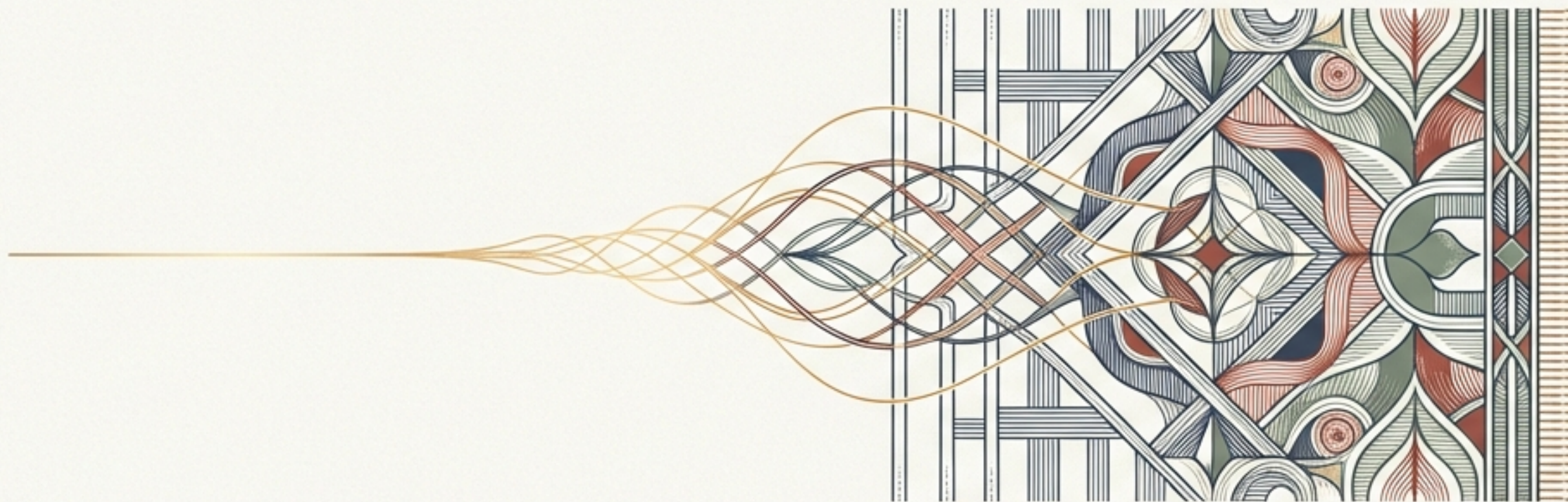


解釈的心理学の論理的基盤

(Theoretical Grounds for Interpretative Psychological Studies)

アブダクションと提喩によるモデル構成法

(A Model-Making Method Based on Abduction and Synecdoche)

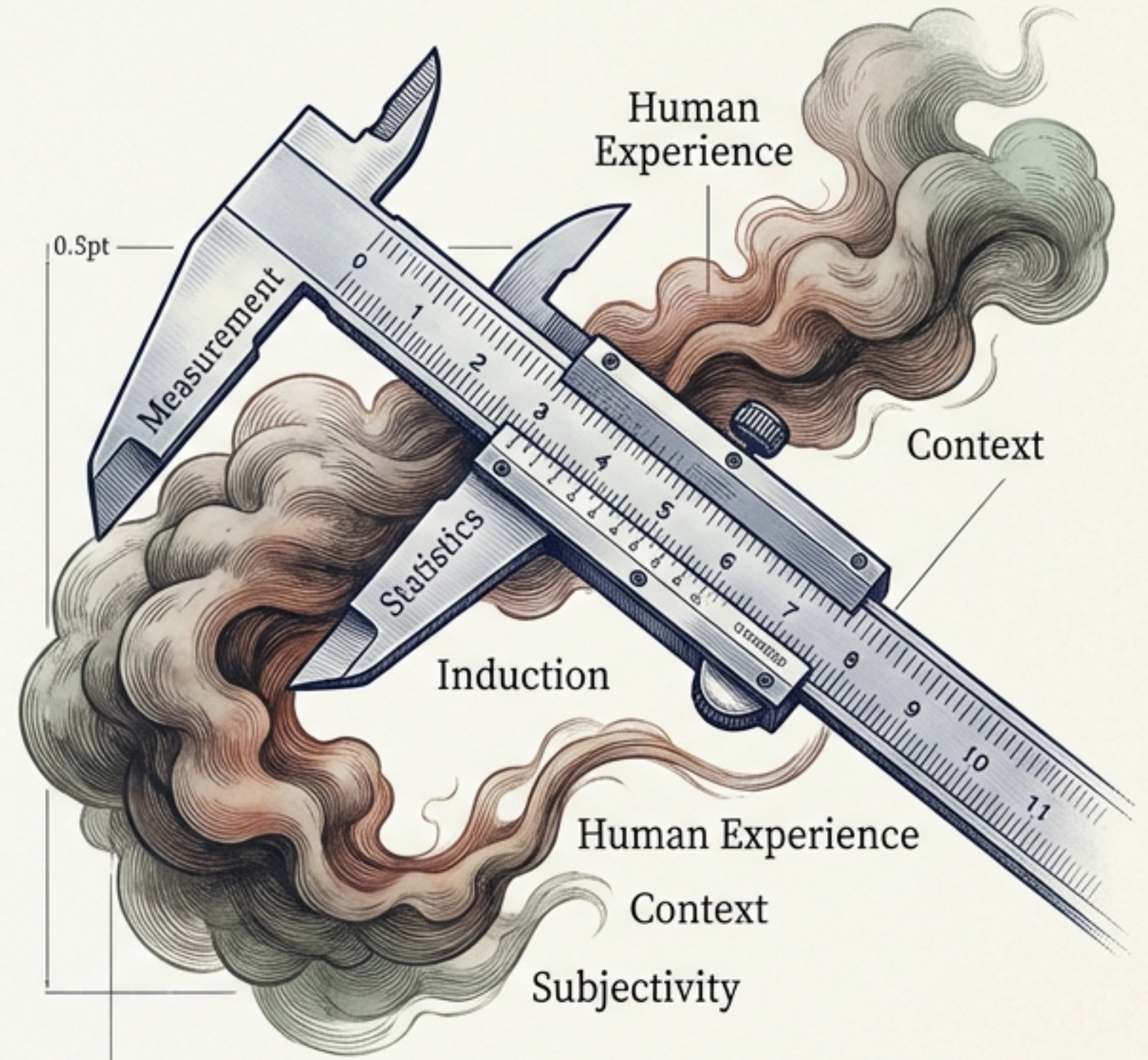


「質的研究は科学的ではない」という批判に対する、認識論的・論理的回答。

Based on the paper by Kasai Toshiharu (2005)
札幌学院大学人文学会紀要 第78号

数量的アプローチの限界と「斉一性」の幻想

- 統計的検定は「帰納」と「演繹」に依存しているが、人間科学においてその前提は脆弱である。
- 自然の斉一性 (Uniformity of Nature)**
J.S.ミルによる公理：「すべてのモノは同じ性質を持つ」。物質科学では有効だが、人間科学では「人間は均質ではない」という事実と直面する。
- 一回性 (One-time only) の排除**
統計は「反復可能性」を前提とするため、個人の固有な体験や文脈依存的な現象を「外れ値」として切り捨ててしまう。



一般意味論からの出発：地図は現地ではない

Map $\neq$ Territory (A. Korzybski)



アリストテレス的論理の限界

$A = A$ (同一律) ?

現実の「私」は常に変化する ($A_i \neq A_j$)。固定的な定義は成立しない。

「客観性」から「事実性(Factuality)」へ

真偽 (True/False) の
判断を保留 (エポケー)

The Unknown World
未知の世界



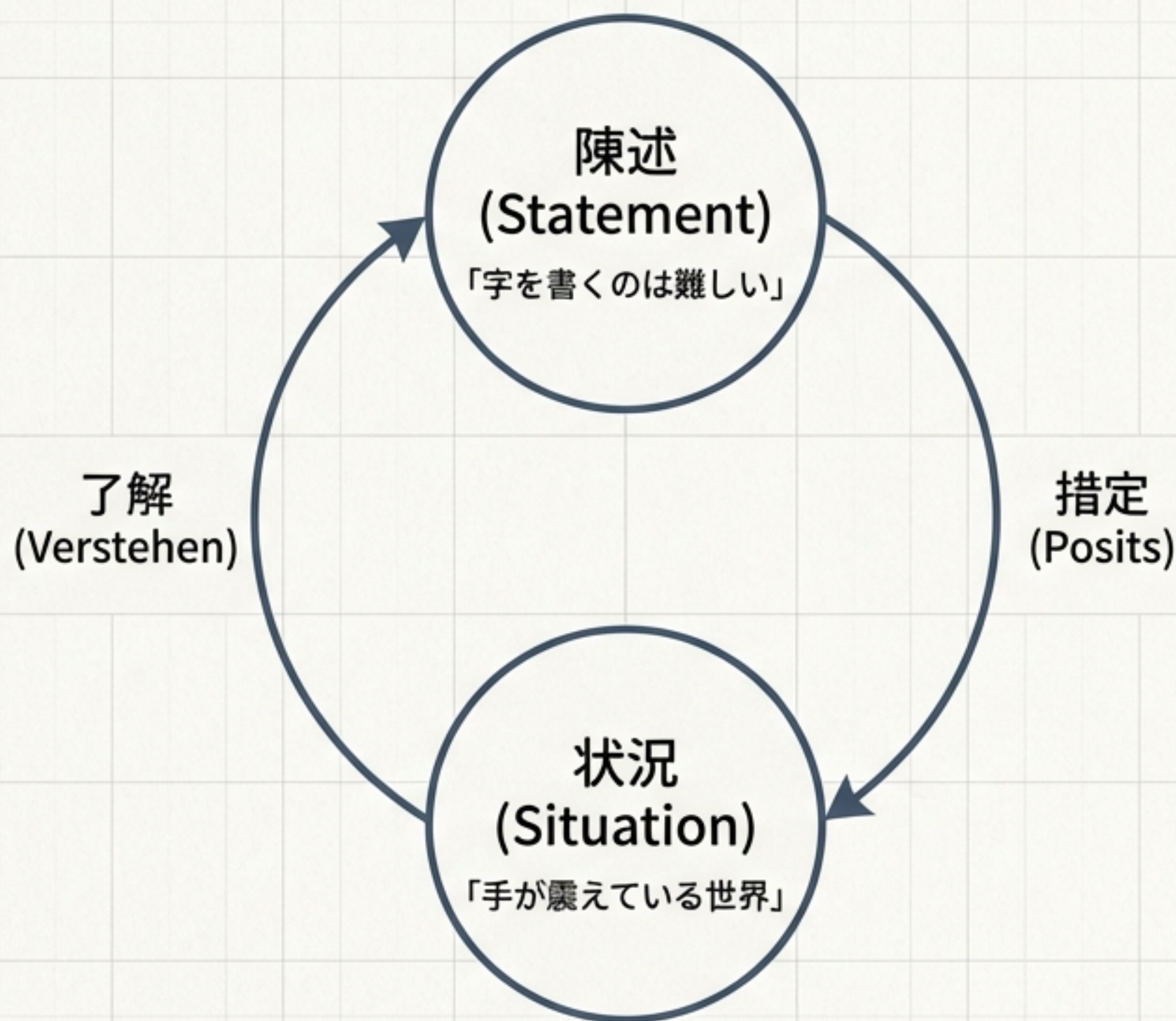
事実性
(Factuality)

対象者が「そう感じた」
「そう言った」こと自体
は、疑いようのない
事実である。

主題化された世界
(Thematized World)
語り手によって切り取られ、
前景化された世界。

措定 (Setzung) : 命題を定立すること。言葉は客観的状況の記述ではなく、本人の世界における現実の措定である。

理解のメカニズム：陳述と状況のトートロジー



同語反復 (Tautology) による理解

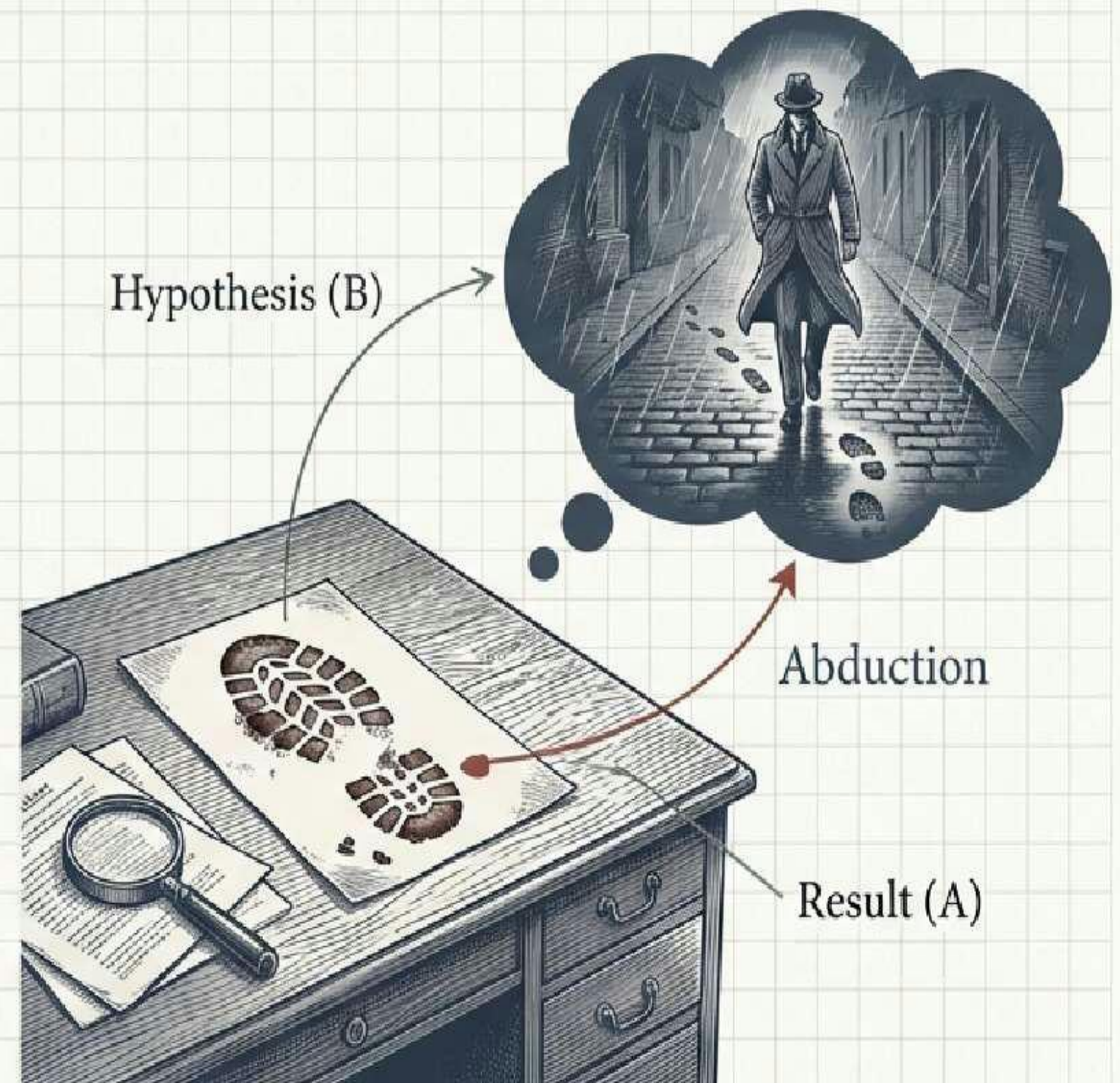
「花が赤い」という陳述は、「花が赤い世界」と世界」という状況を同時に措定する。この循環「この循環こそが、デイルタイの言う「了解」(Verstehen)」の正体である。

アブダクション：仮説を生み出す推論 (The Logic of Discovery)

C.S.パースのアブダクション (Abduction)

帰納（データ→規則）でも演繹（規則→予測）でもない、発見のための論理。

1. [Result] 驚くべき事実 A がある。
2. [Rule] もし B が真であれば、 A は当然の事柄となる。
3. [Hypothesis] ゆえに、 B が真であると疑う理由がある。



「事実」と「理由」によるモデルの構築

Fact: Behavior
行動



Reason/Hypothesis
理由/仮説



Fact: Speech fragments
発話断片



内的整合性 (Internal Consistency)

アブダクションは「事実」と「理由」のトートロジーである。

「なぜそうしたのか？」という理由（仮説）が、行為（事実）と整合するまで推論を積み重ねるプロセス。

Example: Profiling

わずかな証拠から、全体像（モデル）を構築する。質的研究も、語り手の「仮説構成体（モデル）」を構築する作業である。

個から類へ：なぜ「たった一人の事例」が科学になるのか？

The Shift to Generalization via Synecdoche



The Part implies
the Whole.

最大の問い：「 $N=1$ の事例に一般性はあるのか？」

回答：人間の認識は本質的に
提喩的 (Synecdochic) である。

提喩 (Synecdoche / Teiyu)

「類 (Whole)」の代わりに
「種 (Part)」を用いる比喻。

これは単なるレトリックで
はなく、人間の認識の基本
形式である。

例：「パン (種)」と言って
「食料 (類)」を指す。

提喩的認識：私たちは「個」を通して「普遍」を見る

Instant Translation

知覚 (Perception): Specific White Object



認識 (Cognition): Concept of Snow



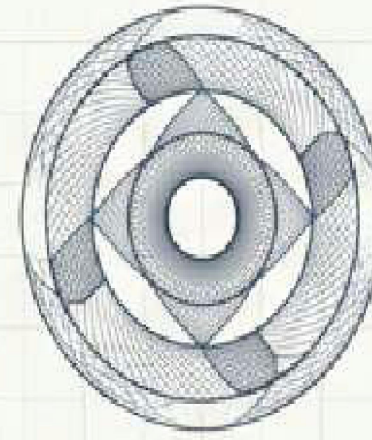
佐藤信夫『レトリック感覚』より

「空から白いものが降ってきた」と知覚した瞬間、私たちはそれを「雪（一般概念）」として認識している。

論理：個別事例（Specific）を知覚することは、即ちその背後にある一般カテゴリー（General）を理解することと不可分である。

飢餓の例：目の前の「パン」は、物質としてではなく「食べ物（類）」として認識される。

事例研究における「一般化」の正体



普遍的モデル (Universal Model)
「人間における不安の構造」

提喩的類化 (Synecdochic Generalization)
Representative of the Class

IS

徹底的に掘り下げられたN=1のモデルは、提喩的作用によって普遍的な理論へと昇華される。

Representative of the Class

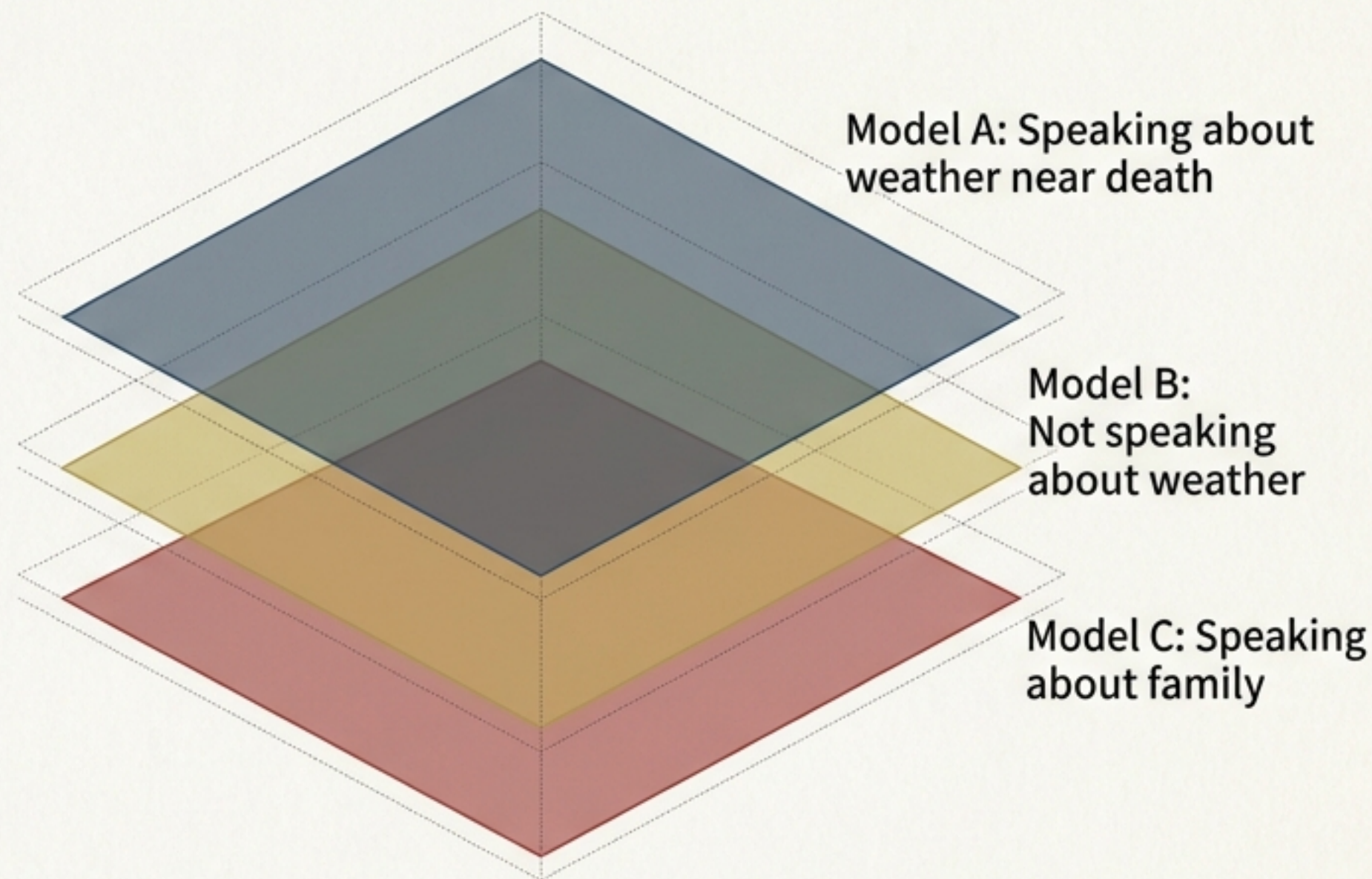


個別事例 (Individual Case): Mr. A
「Aさんの不安」

背反二値モデルから「多重併存モデル」へ

「Aか、非Aか」という二値論理
(Binary Logic) の限界。

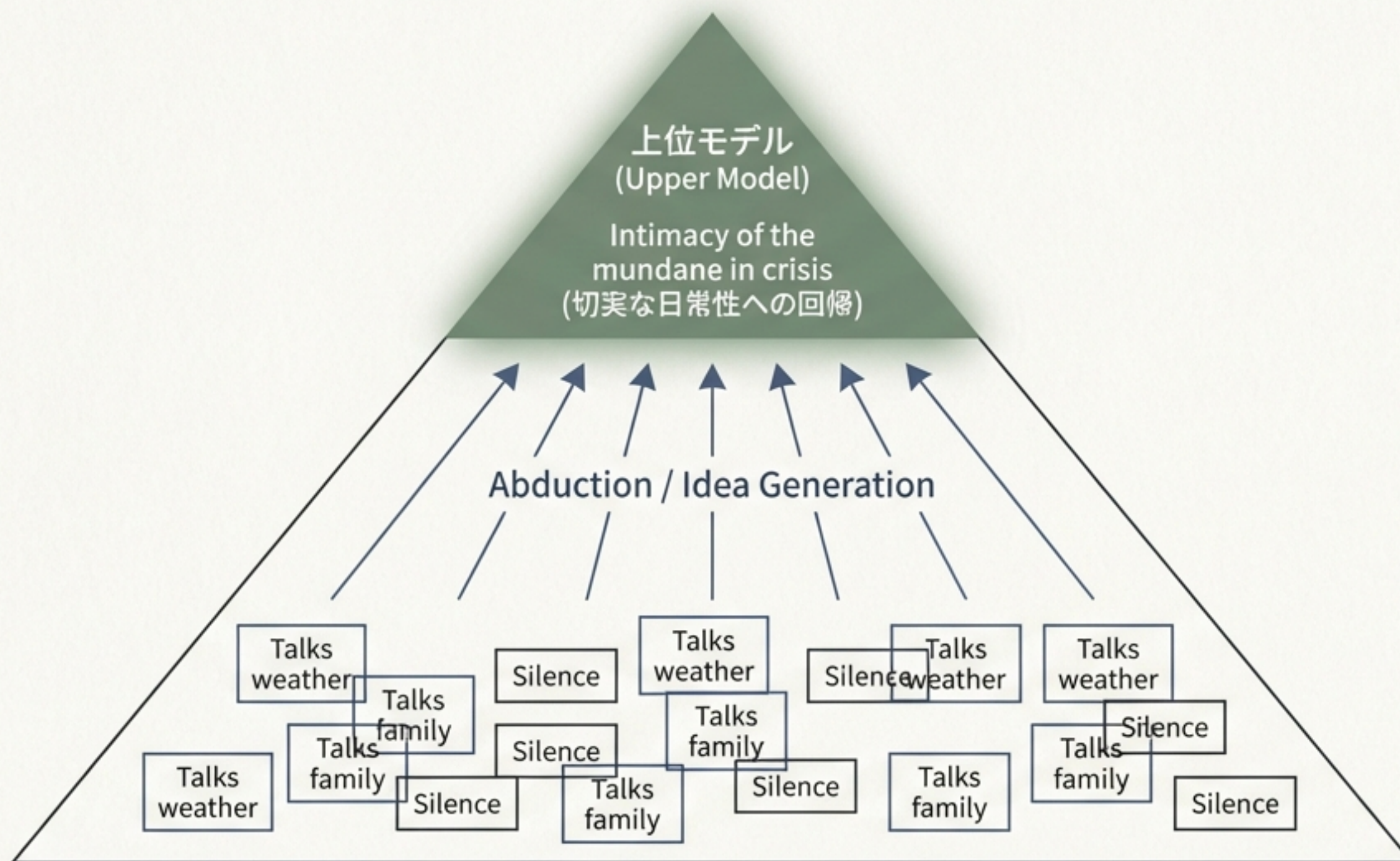
矛盾する複数のモデルは、それぞれが別の「主題化された世界」として並立する。



多重併存モデル (Multiple Collateral Models)

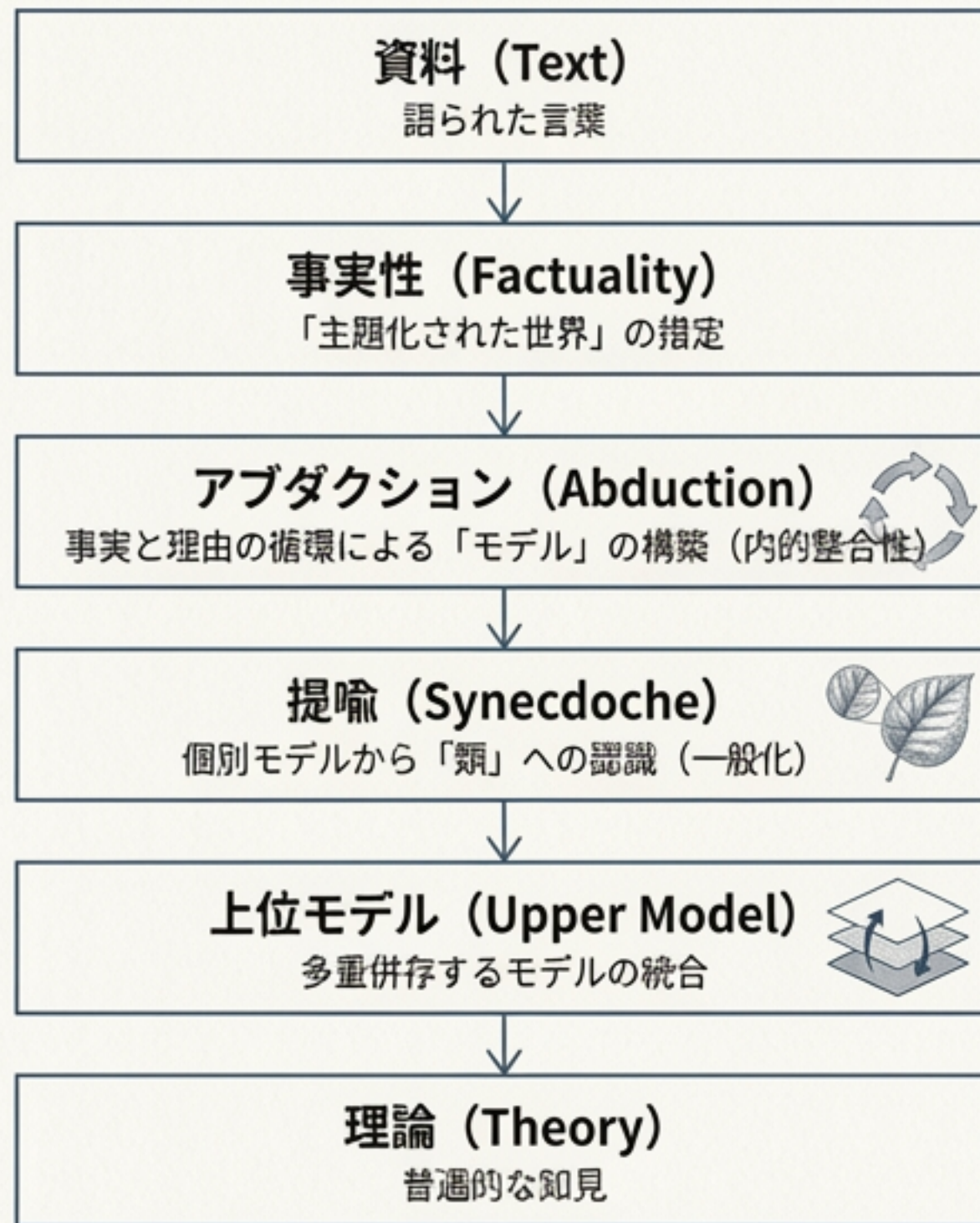
否定し合うのではなく、共存する。問いは「正しいか？」ではなく「存在するか？」である。

上位モデルの発見：発想の飛躍



バラバラに併存するモデルを、より高い次元で統合する。
これこそが理論化 (Theorization) の瞬間であり、KJ法的な「発想」の飛躍である。

解釈的アプローチの論理的階梯 (Summary of the Logical Path)



結論：「モデルの豊かさ」を目指して



- 目的は統計的有意差ではなく、モデルの豊かさ (Richness of the Model) である。
- 事実性の探求 × 深いアブダクション × 妥当な提喩的認識
- 人間存在の「深み」「高さ」「奥行き」に肉薄する。